

乳用牛の輪換放牧育成技術

農業研究センター 草地畜産研究所

担当者：緒方 雄一

研究のねらい

乳用牛の育成は通常畜舎内で行われており、一般的に草地を利用した放牧育成はほとんど行われていない。しかし、放牧育成は足腰を強くし将来にわたって健全な母体づくりに役立ち、また省力、低コストの要因となる。そこで、草地を利用した放牧育成試験を行い、その発育性および経済性などについて検討した。

研究の成果

1 増体成績

放牧区では、開始直後に一時的に増体量が停滞したが、24ヵ月程度では舎飼区と同水準の発育が期待できる結果となった。

2 放牧衛生

放牧を行ううえで、ピロプラズマ症(ダニ熱)の心配があるが、定期的なダニ駆除によって防ぐことができ、発育遅延となるような疾病の影響は見られなかった。

3 費用試算

(1) 各年度毎の放牧区群の初年度1頭当たりの飼料費は、平成6年度群で86.5円/日、平成7年度群で95.4円/日となった。

(2) 初年度1頭当たりの育成費用については、放牧区で229円/日、舎飼区で372円/日となり、放牧区の方が1日あたり約143円ほど安くなる試算となった。

普及上の留意点

1 放牧開始時は、環境が変わり脱糞する場合がありますので、安全な場所で2週間ほど個体の様子を見ること。また、放牧病であるピロプラズマ症対策としておおむね5月~9月の間は、3週間に1度の薬剤塗布を行う。

2 放牧の目安として栄養面、消化の面からみて20cm前後の短い牧草を利用することで効率的な放牧を行うことができる。

3 牧区の設定にあたっては、牧草の生育量を勘案し、放牧馴致によって牧区面積を決めること。

4 春先は、スプリングフラッシュに対応するため小牧区による輪換放牧(滞牧日数を1日~2日)を行うこと。

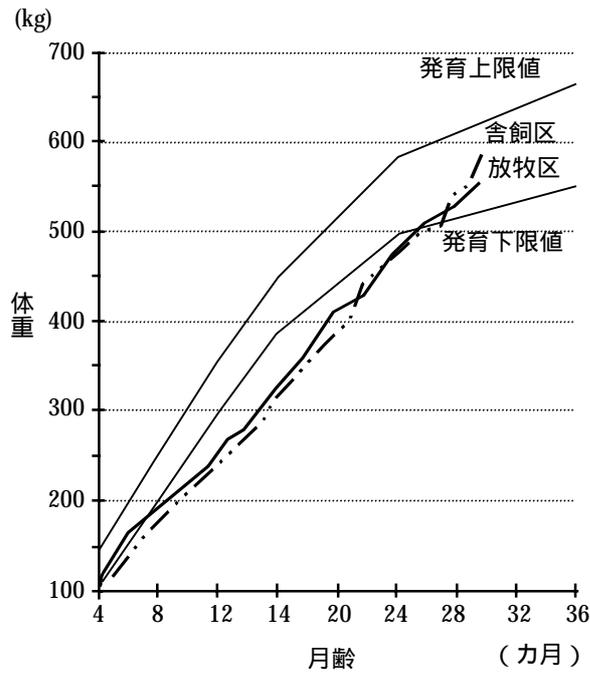


図1 各区の月齢毎体重の推移

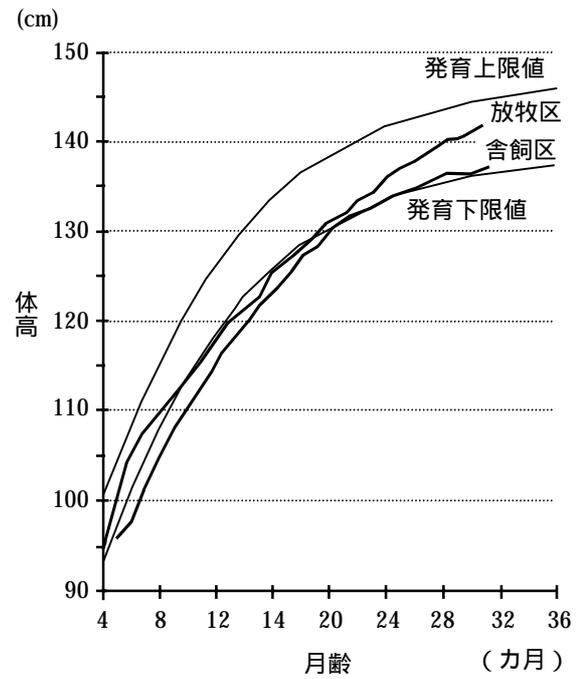


図2 各区の月齢毎体高の推移

表1 各区の開始時期と終了時の体重 (kg)

	放牧区	舎飼区
放牧開始時	104.0	114.0
放牧終了時	580.5	589.3

表2 各区の開始時と終了時の体高 (cm)

	放牧区	舎飼区
放牧開始時	94.0	95.8
放牧終了時	144.1	137.1

表3 各区の放牧期における1頭あたりの飼料費(円/日)

	放牧区	舎飼区
H6年群	86.5	195.4
H7年群	95.4	225.3

表4 各区の初年度の1頭あたりの飼料費(円/日)

	放牧区	舎飼区
放牧期	92.2	214.5
舎飼期	264.3	277.9
通算	224	372

注) 通算の数値は薬剤費、敷料費を含む。